

家庭部会

< 県研究主題 >

家族の一員として生活をよりよくしようと主体的に工夫する能力や

実践的な態度を育てる学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 宮内 麻里子 (相模原地区)

< 研究主題 >

「できる自分」になるための取組

～日常生活に活用しようとする意欲や態度を育てる学習指導の工夫～

1 提案内容

家庭科は、子どもたちにとって生きることそのものを学ぶ必要不可欠な教科だと考える。しかし、現代社会の中で子ども達が基礎的・基本的な知識だけでなく、技能をしっかりと身に付けるのは大変難しい状況にある。特に、「布を用いた生活に役立つ物の製作」の授業において、手縫いやミシン縫いの技能がきちんと身に付かない現状がある。決められた時間内でどうしたら一人一人の子どもがより多く活動でき、技能の定着につながるかを考え、指導の工夫をした。子どもたちには、自分が家族に支えられていることを自覚し、家族に感謝の気持ちをもつと同時に、よりよい生活を送るために自分ができることを少しずつ増やして行ってほしいと願っている。

(1) ガイダンスをていねいに取り扱う

家庭科学習の意味を考え、2年間の学習の見通しをもてるようにし、2年後の自分の姿をイメージできるようにした。

- ① 小学校入学時から4年生までの学習を振り返り、家庭科学習とのつながりを考えるとともに、家族に支えられて成長してきたことを改めて見つめる。
- ② 卒業時になりたい自分の姿を思い描き、家庭科学習への意欲を高める。
- ③ 2年間の家庭科の学習内容を知り、学習方法(見つめる→計画を立てる→活動する→生活に生かす)の確認をする。

(2) 学習意欲を継続する工夫

手縫いの技能を身に付け、子どもの意欲を継続させる工夫として、2学期から朝自習の時間に「チクタクタイム」を設けた。始めのうちは針に糸を通すだけで時間がかかっていたが、やがて5分以内にボタンを付けられるようになった。針を持つことに抵抗がなくなった。

(3) 子どもの発想を大切にする

① エプロンの製作

ポケットやタオルかけを付ける時に、布柄を隠さないように裏に付けるなどの工夫が見られた。

② やませみノート(校外学習冊子)カバーの製作

布の種類や特徴について知り、ノートカバーに適した布を自分で選ぶようにした。また、創意工夫する能力を育むために、「使いやすくするために工夫をしよう」と投げかけた。その結果、ノートが開かないようにボタンを付けたり、ポケットやゴム、しおり等を付けたりする姿が見られた。

(4) 家庭との連携

家庭科通信を発行し、学習のめあて、実習の予定、持ち物に関するお願いを保護者に伝えた。家庭実践終了後はアンケートを行い、わが子の成長を認める声や喜びの声を聞くことができた。

(5) 視聴覚機器を効果的に活用する

手縫いの学習ではDVDを活用し、子どもたちが必要に応じて自由に再生できる環境を整えた。タブレットは写真を拡大できるので、子ども達にとって分かりやすく学んだことを共有しやすかった。

2 協議内容

(1) ワークシート「できるようになったよ」の使い方について

- ・衣生活、食生活、住生活ごとに付箋の色を変え、できるようになったことを書いて貼っていった。

(2) エプロンの製作における創意工夫へのアプローチについて

- ・製作に必要な知識と技能を十分押さえてから、「どうすればもっと使いやすくなるだろう」と投げかけた。タオルかけの間を縫い、ペン差しにする子もいた。作品を紹介し合う場が、さらに工夫してみようという意欲につながった。

(3) 題材構成の工夫について

- ・ガイダンスを行い、子どもたちができるようになりたいと願ったことを、教師が子どもに身に付けさせたい力と兼ね合わせて、題材構成を工夫した。

(4) その他

- ・「チクチクタイム」が新鮮だった。継続することで自信につながった。
- ・やませみノートカバーでは、実際に使う中で中身がこぼれた体験を通し、宿泊学習後にボタンを付けた子がいた。自分の作品への愛着を感じた。

3 まとめ

(1) テーマについて

○創意工夫する能力を高めるためには、まず始めに参考作品などを提示し、子どもたちの「できるようになりたい」「自分もこんなふうに作りたい」という思いや願いを十分に引き出すことが大切である。子どもたちが目的意識をしっかりともち、知識と技能を主体的に身に付けられるようにしていく。基礎的・基本的な知識と技能の定着が、創意工夫する能力へとつながっていく。

(2) 年間指導計画について

○ガイダンスは、家庭科の時間に何を学ぶか、4年生までの学習とどうつながっているのか、それぞれの学年のめあては何か等についてじっくりと話し合う。その声を、学校の特徴に合わせて年間指導計画に反映させていく。そうすれば、たとえ担任が変わっても、2年間を見通しながら学習を進めていくことができる。また、年間指導計画を作成するにあたっては、子どもたちの実態や地域の特性等もふまえ、「子どもたちにどのような力をつけたいか」をよく考えて作る。行事や総合的な学習の時間との関連も考慮し、ストーリー性のある計画を立てていきたい。

(3) 評価計画について

○学習のねらいに照らし合わせて、具体的な姿として子どもを見取る。1時間1時間の見取りを積み重ね、総合的に評価をする。ワークシートを作成する時は、子どもたちが何を考え、何を書いたら「おおむね満足できる」のか「十分満足できる」のかを明確にする。

(4) 教師の発問について

○エプロンや、やませみノートカバーを作った時に「使いやすくするためには何が必要か」と投げかけているのがよい。子ども達の中に必然性が生まれ、なぜそれを作るのか、何のために工夫するのかを理解して取り組むことができる。

＜研究主題＞

家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度の育成を目指して

1 提案内容

題材名「工夫しよう暖かな生活」

寒い季節を迎え、子どもたちは室内でも登校時のまま防寒具などを着用していたり、肌着を着ないでトレーナーを着用していたりする姿が見られた。また、室内を暖めるための暖房器具はエアコンが中心となり、電気エネルギー削減への意識はあまり高いとは言えないと感じた。

そこで本題材では、あまり意識せずに過ごしてきた冬の自分の家庭生活に関心を持ち、改めて問題点を見つめていきたい。そして、課題意識をもって調べることで、重ね着や保温性の高い着方をすることや光を集めて室温をあげることなど、普段の生活で体感したり無意識に行ってきたりしたことに意味があることを理解させたい。また、それは環境保護及び省エネルギーにもつながるのだということを子どもたちにも気づかせ、更なる自分の生活の工夫改善に取り組めるようにしていきたい。

(1) 主題への迫り方

- ①言語活動を行うための工夫として、家庭生活を振り返るような発問を心がけた。
- ②実験結果から考察し、考えを確かめられるようなワークシートを作成した。

(2) 授業展開

- ①ペットボトルを身体に見立てた実験。ペットボトル容器に、80℃のお湯を入れ、A：何も着せない B：Tシャツ C：フリース D：トレーナー E：セーター F：重ね着（Tシャツ+トレーナー）とそれぞれ衣服を着せて、お湯の下がり方を見て保温力を確かめた。
- ②予想は、Fの重ね着が一番保温力が高いと考えた児童が多かったが、2番目は、Cのフリースと考える児童が9人、Dのトレーナーは7人、Eのセーターは4人いた。予想を立てられない児童もいた。
- ③実験結果（下がった温度 A：52℃、B：42℃、C：40℃、D：45℃、E：44℃、F：29℃）をワークシートに記入し、実験結果から分かったことを話し合った。

(3) 授業から見えてきたこと

①言語活動を通して

予想を書くことができなかった児童が、交流場面後には寒い日のコーディネートを自分なりに考えることができていた。これは、交流場面で友達の発言に触発された結果だと考える。児童のそういった変容から、言語活動の大切さを改めて学んだ。

②子どもたちの学びから

学習活動の評価について、実際に児童が記入したワークシートをもとに、予想、実験結果から考えたこと、寒い日のコーディネートとどのように子どもが変容し、どう評価したのかを提示した。例えば、ある児童2人は、これまでの自分の感覚によってトレーナーが暖かいのだと予想していたが、実験結果を根拠にして、衣服の働きについて日常生活を振り返り、自分の考えを図に表現したいという思いをもつことができた点を評価した。また、普段の生活で素肌にトレーナーという服装が多かった児童が、実験と本時の授業を通して、「重ね着をすると暖かい」と理解し、学習後は重ね着を意識した服装に変容していった。知識が知恵となり実生活に

結び付いていく姿を見ることができた。

2 協議内容

(1) 課題設定の工夫

・夏の「くふうしよう さわやかな生活」の学習を振り返り、その学習を土台にして、冬の場合になったの「暖かい生活」の状況を子どもたちに問う場面から、課題を設定した。

(2) 実験方法について

・子どもたちから実験方法を考えさせたわけではない。教師側が子どもたちの実態に応じて提示した。毎日の生活から実際に身に付けている衣服の素材を選んで実験を設定した。

・子どもたちが生活を見つめ自分の課題をもつことが問題解決学習には必要。今、自分が着ている服の着方にはどんな問題点があるのかをつかむことが大事だと感じた。何らかの形で子どもたちから提示された実験方法が、どこか一部でもあるとよかったと感じた。

(3) 「快適に過ごすために」の「快適」を、子どもたちはどのようにとらえているか。

・「快適に過ごす工夫をどのようにしているか」という問いから学習を始め、いろいろな考えが出された。特に、大雪が降った後で、「寒いから暖かくする。」という考えが多かった。

(4) ワークシートの工夫

・「個」→「全体」→「個」で考えられるようにできていた。予想を立て、実験の結果から考えを全体で話し合っ、さらに自分のコーディネートを考えるワークシートになっていた。

・子どもたちが書いたワークシートから先生が見取り、課題を確認し、授業を通してどのように変容したか評価している点が素晴らしかった。

(4) その他

・家庭実践したことによって、どうであったかということをもみんなで共有して、この先どのようにしていこうと考えることが学習の目標達成に必要なと感じた。

・5, 6年生の学習の系統性を考えると、5年生の冬に「あたたかい生活」、6年生の夏に「すずしい生活」の学習を行い、実験などの学び方も身に付けていく方法も考えられる。

3 まとめ

(1) テーマについて

○実践的な態度の育成として、身近な場面から実験を取り入れた授業展開は、実感を伴った体験活動として大変良かった。

○日頃から様々な角度から言語活動を意識し、思考の流れを考えた授業を行っているところが、ビデオの子どもたちのつぶやきからもよく伝わってきた。ていねいに見取って評価している点が素晴らしかった。

(2) 評価計画について

①年間計画を意図して取り組み、夏のくらしのところで、冬のくらしを見通していた。

②子どもたちが主体的に予想を立てたり、実際に結果を確認し実感をともなって理解したりすることができ、日々の生活に生かしている点がよかった。

③ワークシートが2時間分を1枚にまとめたことで、子どもが自分自身でも変容を見て取れ、教師自身も子どもの変容を見取ることができた。